



もういちど 始めよう

和乃 璃瑚

耕助の両親は商売をしていた。

小さな酒屋だったが、なかなか繁盛していた。近くに酒屋がなかったせいもあるだろうが、両親の人柄も大きく影響しているようだった。

父親は無口ではあったが、愛想が悪いわけではなく、温厚そうな表情には、いつも優しい笑みが刻まれていた。反対に母親は、いつも大きな声で四六時中しゃべっていた。この母親を見ると、町内の全員と知り合いなのかと思うほどだった。

そんな両親だったから、店には買い物客以外の人達もよく集まった。

耕助が学校から帰ると、皆が口々に言った。

「お帰り」

「しっかり勉強してきたか？」

「ちゃんと手を洗ってうがいしなよ」

耕助は町中の人達に育てられているようなものだった。

耕助は、いわゆるガキ大将というわけではなかったが、いつも友達に囲まれている人気者だった。

休み時間になると、我先にと校庭に飛び出し、走り回っていた。授業中はと言うと、次の休み時間に何をして遊ぶか、給食の献立は何か、放課後はどう過ごすか、そんなことばかり考えていた。

当然勉強には身が入らず、宿題もいつも忘れて来ていたので、先生に怒られることはしょっちゅうだった。もちろん怒るのは先生だけではない。母親にも怒鳴られてばかりだった。

学校から帰るなりランドセルを放り投げて、またすぐに出掛ける耕助に、

「宿題やってからにしな！」

と母親が言った時には、もうすでに耕助の自転車は小さくなっていて、母親はため息をつきながら、また店の中に戻るのだった。

耕助は毎日、自転車に乗って学校の裏山へ行き、友達と秘密基地を作ったり、虫を捕ったりして、暗くなるまで遊んだ。暗くなってきて遊ぶのが困難になる頃、ようやく家路についた。その頃になるともうお腹はペコペコで、家に着くとすぐつまみ食いをして、また母親に怒られたりした。

そんな時父親は、大きな手で耕助の頭をくしゃくしゃとなで、優しく笑っていた。母親は「お父さんもたまには耕助にしかってやって下さいよ」

とよく言っていたが、父親は

「男の子はこれくらいがちょうどいいんだよ」

と言って、いつも庇ってくれていた。

耕助はそんな父親が大好きだった。かと言って、母親が嫌いだったかと言うと、そうではない。

水泳大会で頑張ったり、運動会で1等になったりすると、何も言わなくても必ず耕助の大好き物を作ってくれたし、何か嫌なことがあっても豪快に笑い飛ばすところも好きだった。

耕助は、両親や町の人達の温かい愛情に包まれて、元気に育っていった。

みのりは小さい頃からしっかり者だった。いや、しっかり者にならざるを得なかったのだ。

父親は幼い頃に他界し、母親が女手ひとつでみのりと弟を育ててくれている。細かいことは分からないが、それはとても大変なことなんだということだけは、みのりにも分かっていた。

朝早く起きて、みのりたちの朝食と夕食の準備をして出掛け、夜遅くまで働いている母を、みのりは尊敬していた。毎日学校から帰っても誰もいないのは寂しい時もあったが、母親が頑張っているのを見るのも好きだった。

平日はほとんど会えないので、みのりは母親と交換日記をしていた。みのりが学校であったことなどを書くと、母親は疲れているはずなのに、たくさん返事を書いてくれた。学校の行事にはちゃんと休みをとって来てくれていたし、休日にはたくさん甘えさせてくれた。

だからみのりも、そんな母親を少しでも助けられるように、できることは自分でやるようにした。まだあまり自分のことをしっかりできない弟の面倒もよく見て、近所でも評判の仲良し姉弟だった。

覚えたての料理を何時間もかかって作った時、母親は「すごいね、みのり。おいしいよ。ありがとう」と言って抱きしめてくれた。

母親が喜ぶのを見たくて、みのりは一生懸命、料理を勉強した。休みの日には、母親と一緒に台所に立ち、新しい料理を覚えた。

みのりたち家族の暮らしは決して裕福とは言えなかったが、みのりはとても幸せだった。

中学生になって、耕助はサッカー部に入った。耕助の学校では野球部とサッカー部が人気を二分していたが、元来すばしっこい動きには自信のある耕助は、迷うことなくサッカー部を選んだ。

練習は思ったよりもきつかった。来る日も来る日も筋トレが続いた。

すぐにサッカーの練習ができると思っていた耕助は、正直嫌になる日もあった。だが、ついていけなくて逃げ出したと思われるのが癪だったので、歯を食いしばって頑張った。

筋トレがそれほど苦痛ではなくなってきた頃、ようやく1年生の耕助たちにもボールを蹴るチャンスがめぐってきた。と言ってもただのドリブル練習だったが、耕助は自慢の脚で、ここぞとばかりにアピールした。

練習後に先輩たちが

「あいつ、使えそうだな。いい脚持ってるんじゃないか」

と話しているのを聞いたとき、耕助は間違いなく自分のことを言っているのだと思った。

――2ヵ月後には試合がある。うまくいけば補欠くらいには入れるかもしれない。

そう思った耕助は、毎日練習に励んだ。

試合が近づいて、出場メンバーの発表の日がきた。1年生からひとりだけ補欠に入る奴がいるということは、前から聞いていた。耕助は、皆の羨望の眼差しを想像すると興奮してしまって、昨夜はなかなか寝付けなかった。

――今日、俺のデビューが決まる。どう見ても、1年の中では俺が1番うまいはずだ。選ばれるのはきっと俺だ。

耕助はワクワクしながらグラウンドへ向かった。

いよいよ練習後のミーティングが始まった。

「前に言った通り、今回の試合では補欠に一年がひとりだけ入る。2年も3年もしっかり鍛えてやってくれ。他の1年は、早く追いつけるように、今後も練習に精を出すように」

監督はそう言って、次々とメンバーを発表していく。耕助はドキドキしながら自分の名前が呼ばれるのを待った。

「で、最後に補欠の1年だが……、松村だ。しっかりな、松村。では、解散！」

「ありがとうございました！」

皆が声を揃えて言い、バラバラと散らばっていく。耕助は声を出すことも、動くこともできなかった。

――なぜだ。なぜ俺じゃなくて松村なんだ。あいつより俺のほうがドリブルだってうまくできるのに。

「おめでとう！」

「くそ～、羨ましいな」

「すごいな、お前」

皆が口々に声を掛けている。ショックを受けていることを悟られたくなくて、耕助も声を掛けた。

「お前が選ばれると思ってたよ。頑張れよ。俺も早く追いつくからさ」

心にもないことを言う自分自身にも、耕助はひどく傷ついた。まだ盛り上がっている仲間の輪を、耕助はそっと抜け出した。

耕助にとって初めての挫折だった。自分がなぜ選ばれなかったのか、耕助にはまったく分からなかった。それほど自信があったのだ。悔しくて悔しくて、耕助は空き缶を蹴飛ばしながら歩いた。

その時、いきなり後ろから肩を叩かれた。びっくりして振り向くと、同じサッカー一部の3年生だった。

「どうしたんだよ、そんなふてくされた顔で」

先輩がそんな風に耕助に声を掛けたことに、耕助はまた驚いた。3年生の先輩といえ、1年の耕助たちにとっては近付きがたい存在だった。もちろん、先輩のほうからフランクに後輩に話しかけるなんてこともない。小学生の頃は2つくらい上でも同じレベルで話すことができていたのに、中学に上がると、その2つがとてつもなく大きく感じられていた。

特に運動部の場合は上下関係が厳しい。だから耕助は、反射的に「すみません」と謝ってしまった。

すると先輩は大きな口で笑って言った。

「謝ることはないよ。先輩がみんな怖いわけじゃないんだから。それに先輩だからってそんなにビクビクしてたら、試合に一緒に出ることになった時に困るぜ」

「でも俺は出られないっすから」

耕助はつい言ってしまった。先輩は黙って耕助を見ている。怒らせてしまったのかと耕助は不安になったが、先輩はニヤッと笑って耕助の肩を抱いてこう言った。

「よし、ちょっと付き合え」

先輩は耕助の返事も聞かずに歩き出した。

駅前のハンバーガーショップに入ると、先輩はハンバーガーを4つとコーラのLを2つ注文した。

そしてドカッと席に座ると、耕助に言った。

「食え。ただし2つだけな」

耕助は訳が分からなかった。

「あの、先輩……」

「いいから食え。人間は腹が減っていると気持ちも減入るもんなんだ。って、これは俺の親父がいつも言ってるんだけどな」

そう言われてみると、耕助もお腹がペコペコだった。

「ありがとうございます。いただきます」

耕助はものすごい勢いで食べ始めた。

空腹がいやされて落ち着いた時、先輩が口を開いた。

「お前、自分が補欠に入れるって思ってたんだろ？」

耕助は恥ずかしくて黙っていた。

「凶星だな。しかもかなり自信があった」

耕助は目を丸くして先輩を見た。1度も話したことのない先輩がそこまでお見通しだとは驚きだった。と同時に、この人になら何でも話せるような気がした。

「恥ずかしいですけど、そうです。俺が絶対選ばれるって思っていました。1年の中では俺が1番うまいって自信がありました。でも選ばれたのは松村だった。すごく悔しいのに、格好つけて『お前が選ばれると思ってた。頑張れよ』なんて言っちゃって……。俺、情けないっす。先輩、教えてください。俺のどこがいけないんですか？ どうすれば選ばれるようになるんですか？」

先輩は耕助の言うことをじっと黙って聞いていたが、少し考えて言った。

「お前は確かに1年の中ではとび抜けてうまい。けどな、お前には決定的に足りないところがあるんだ」

「足りないところ？」

「そうだ。いいか、サッカーはチームワークなんだ。ひとりでやる競技なら、松村ではなくお前が選ばれたかもしれない。けどサッカーは11人でやるもんだ。ひとりの人間が『自分が活躍しよう』と頑張ってもだめなんだ。お互いがサポートしあって初めて成り立つんだ。今のお前には、それができない。だから選ばれなかったんじゃないかな」

耕助は言葉がなかった。

——確かにそうだ。俺はいつも、自分をアピールすることしか考えてなかった。周りが俺をサポートしてくれているのにも気付かず、ひとりでやっていると思い込んでたんだ。俺は馬鹿だ……。

耕助が唇を噛んでいるのを見て、先輩が言った。

「まあそんな深刻な顔すんなって。俺もはじめはそうだったんだぜ。ほんとはな、この言葉は俺が1年の時に監督に教えられたんだ」

「先輩が？」

耕助はまた驚いた。今日はやけに驚くことが多い。

サッカーが上手いだけでなく、皆への気配りをできる人気者の先輩にもそんな頃があったなんて、耕助には信じられなかった。

「ああ。俺もお前と同じように自信満々だったんだ。いや、お前よりひどかったな。監督に抗議しにいったんだから。その時に監督に言われたんだ。『勝利はひとりで勝ち取るものじゃない』ってな」

「勝利はひとりで勝ち取るものじゃない……」

「そ。皆で勝ち取るからこそ、意味があるんだって。その時は俺も漠然としかその言葉の意味が分からなかったんだけどさ。でもやっていくうちに分かったんだ。ひとりで何かを勝ち取ったときより、皆で勝ち取った時の方が、喜びが大きくて長く続くんだった。後になっても何回も話せるしな。これがチームプレーの醍醐味なんだなって、その時思ったんだ」

耕助は目からウロコだった。まだその感覚を実感してはいないが、早くそれを実感してみたいと思った。

「先輩、ありがとうございました。俺、次は絶対選ばれてみせます！」

その日から先輩は、耕助の憧れであり、見本であり、目標になった。もちろん実力も落とさないように、毎日練習に明け暮れた。あんなに嫌だった筋トレも、帰宅後にもひとりでやるようになった。

そんなだったから、当然成績は下から数えた方が早いぐらいだったが、耕助の熱心さを見て、両親は何も言わずにいてくれた。

耕助のサッカー漬けの青春が始まった。

女の子は総体的におませだ。中学生ともなると、男の子の目を意識するようになる。何年何組の誰それがかっこいいだの、誰と誰が付き合っているらしいだの、いろいろな情報が飛び交う。中にはすでに化粧を始める子もいたりした。

そんな中で、みのりはかなり奥手なほうだった。というより、学校の勉強とクラブ活動と家事で忙しく、そんな暇はなかったのだ。かといって、周りの皆を羨ましいと思うわけではなく、みのりなりに毎日を楽しんでいた。好きなアイドルの切抜きを友達と交換したり、おこずかいを貯めてコンサートに行ったり、たまには友達とアイスクリームを食べて帰ったり、楽しいことは山ほどあった。

そんなみのりに変化が現れたのは、中学2年の夏休みだった。

中学に入ってバレーボール部に入っていたみのりは、夏休み中も練習の為に毎日学校へ行っていた。1年生の頃はボール拾いがメインだったが、今はみのりたちもコートに入って練習に参加している。

結構強いチームだったので練習はとても厳しく、『100本ノック』ならぬ『100本カット』というのがあった。コーチがネット近くで台の上からアタックに見立てて打ったボールを、すべて正確にセッターに返す練習だ。実際は100本もなくてたった10本だけなのだが、この10本というのは一本も失敗しなかった場合の話だ。つまり、1本でもカットが乱れると、カウントはまた1本目からに戻る。だから結果的には100本くらいになる人もいるかもしれないということで『100本カット』と呼ばれ、部員たちが恐れる練習メニューのひとつだった。

その日もまた厳しい練習に向かうため、みのりは自転車をこいでいた。

雲ひとつないいい天気で、つまりはとんでもなく暑い日だった。家を出るなり汗がダラダラ流れてくる不快感と闘いながら、みのりはペダルを踏み続けた。

むこうから車が来たので端の方に寄った時、車のフロントガラスに反射した太陽が目飛び込んできた。あまりの眩しさに目をそむけた途端、歩道との段差にぶつかって、自転車ごと倒れてしまった。

「いった〜い！」

見ると手と膝をすりむいている。だが幸いひどい打撲はなさそうだ。捻挫なんてしようもんなら練習ができなくなる。みのりはほっとして立ち上がり、制服のスカートをポンポンとはたいた。

すると横で誰かが自転車を起こしてくれた。

「あ、すみません」

言いながらその人を見ると、男子バレー部の3年生だった。

「大丈夫？ 頭とか打ってない？」

「はい、大丈夫です。ちょっとすりむいただけで」

「それならよかった」

「先輩もこの辺に住んでらっしゃるんですか？」

「うん、2丁目」

「それじゃあ近くだったんですね。ぜんぜん知りませんでした」

先輩は微笑んでから

「じゃ、気をつけて」

と言い残して行ってしまった。

しばらく先輩の後姿を眺めてから、みのりはきちんとお礼を言ってないことに気づいた。

――後で学校で会えたら、ちゃんと言わなきゃね。

そう考えたみのりは、なぜだかウキウキしていた。

――なんでだろう。この胸の感じ。ちょっと痛くて苦しくて……。もしかしてこれって恋？ なんて、まさかね。

そのまさかだった。みのりは完全に恋に落ちていた。

練習開始ギリギリに体育館に着いたみのりに、仲良しの道子が駆け寄ってくる。

「今日は休みかと思っちゃった。どうしたの？ みのりがこんなギリギリに来るなんて」

「実は来る途中、自転車でこけちゃって」

「えー！ 大丈夫なの？」

「うん、たいしたことないの。ちょっとすりむいたくらいで」

「んも～、みのりったら、しっかりしてんのに意外とおっちょこちょいだったりすんのよね。気をつけなよ」

道子の言葉に相づちを打ちながら、無意識のうちに、みのりは隣のコートに先輩の姿を探していた。

練習後、先輩になかなか声を掛けられずにいると、道子がみのりを校庭の隅に引っ張っていつて言った。

「みのり、田畑先輩と何かあんの？」

田畑先輩というのは、自転車を起こしてくれた先輩、つまり（自覚はないが）みのりの恋の相手だ。

「な、何も無いよ。今朝こけた自転車を起こしてくれたから、お礼を言おうと思っただけよ」

「ふ～ん」

道子がニヤニヤしながら言う。

「みのりさ、練習中も田畑先輩のこと目で追ってたよね。助けてくれた王子様を好きになっちゃったんじゃないの？」

「そんなことないよ！ だってちゃんとしゃべったの、今日が初めてだし、目で追ってたのは、単にちょっと気になっただけで……」

みのりはムキになって反論した。すると道子が分かったような顔で言った。

「それが恋ってもんよ」

その瞬間、みのりは心臓を銃で撃たれた……ような気がした。

その日以来、みのりは寝ても覚めても先輩のことを考えていた。廊下ですれ違っても、会釈するのが精一杯だった。それでもみのりは幸せだった。

ところがそのささやかな幸せを打ち砕く出来事が待ち構えていた。

クリスマスも近くなった頃、みのりは道子と一緒に久々のショッピングに出掛けた。何時間も歩き回り、さすがに疲れた2人はクレープ屋に入ることにした。

2人で何にするか迷っていると、後ろに人が立った。何気なく振り返り、みのりは息が止まりそうになった。

「た、田端先輩！」

それ以上しゃべることのできないみのりの代わりに、道子が先輩に話し掛けた。

「こんにちは。先輩、おひとりなんですか？ もしよかったら、私たちと一緒に座りませんか？」

「いや、今席を……」

先輩が言いかけたところへ、可愛らしい女の人が駆け寄ってきた。

「ねえ、席あったよ。荷物だけ置いてきた。何にするか決めた？」

そこまで言って、みのりたちに気付いた。

「知り合い？」

「うん、クラブの後輩」

と説明してから、みのりたちの方を向き、

「ついでだから紹介しとくよ。これ、俺のカノジョ」

「ついでって何よ～、しかも『これ』だなんて」

すねる「カノジョ」を

「気にしない気にしない。クレープおごってやるからさ」

などとなだめながら、2人で注文カウンターの方へ行ってしまった。一応「それじゃ」と声を掛けて行ったものの、2人は完全に自分たちだけの世界に入ってイチャイチャしている。

「みのり……」

心配そうにみのりを見る道子に、みのりは精一杯の笑顔で言った。

「さ、早く食べよ！ 私、チョコバナナに決めた！」

みのりの初恋は終わった。それも自分で答えを求めた訳ではなく、神様から答えを突きつけられる形で。

1週間、みのりはクラブの練習を休んだ。毎日ベッドで泣いていた。道子は毎日みのりの家に来て、一緒に泣いたり励ましてくれたりした。何も知らないはずの母も、みのりの大好きなケーキを買ってきてくれた。弟は一生懸命みのりの代わりにご飯を作ってくれた。

皆の愛情に支えられて、みのりは少しずつ元気を取り戻した。

みのりの青春は、まだ始まったばかりだった。

今日は大学に入学式だ。まるで借り物のようなスーツに身を包んだ耕助は、期待で胸を膨らませて門の前に立った。

――ここから俺の新しい青春が始まるんだ。

耕助は「よしっ」と気合を入れて、門をくぐった。

みのりは不安でいっぱいだった。周りの人は皆おしゃれで、化粧もしている。野暮ったいスーツ姿の自分を見下ろして、みのりはため息をついた。

――ちゃんと馴染めるのかな。

みのりは不安を振り払うように、深呼吸をひとつした。

校内では、いたるところに簡易テーブルが並べられ、手描きのポスターが掲げられていた。新入生を勧誘するサークルや体育会系のクラブだ。皆大きな声を張り上げて、ひとりでも多くの新入生を獲得しようと躍起になっている。

その中で変わったサークルがあるのに耕助は気付いた。テーブルの横に置いた看板には、『スポーツ観戦サークル・ゲームセット』と書かれている。

中学・高校とサッカーを続けてきた耕助は、イベントサークルは生ぬるい気がしたし、かと言って体育会系に入ろうという程の思いもなかった。そんな耕助にとって、『スポーツ観戦サークル』というのは魅力的だった。

「よし、これにしよう」

耕助はつぶやいて近づいていった。

みのりは周りの雰囲気気圧されながらも、サークルの看板をチェックしながら歩いていた。――せっかく入学したんだもん、いつまでもビクビクしてちゃもったいないよね。まずは友達を作って、大学生活を思いっきり楽しまなきゃ！

ふと見ると『スポーツ観戦サークル・ゲームセット』という看板が目に入った。さっそく入会の申し込みをしているらしき男の子もいる。

――バレーボールも観に行くのかな。それだったらここもいいかも。

みのりはとりあえず詳しいことを聞いてみることにした。

そろそろ長袖では暑く感じるようになってきた頃、『ゲームセット』の新入生歓迎コンパが催された。やはり特殊なサークルだからなのか、それともたまたま今日だけなのかは分からないが、思ったよりは人数が少なかった。と言っても、すぐさま全員の名前が覚えられる程ではなかったが。

飲み会はとにかく盛り上がり、あちこちでスポーツ談義に花が咲いていた。店を出る頃になっても話は尽きず、2次会に行こうという話も出たのだが、既にもう遅い時間になっていたこともあって、耕助は帰ることにした。他にも何人か帰る人がいたので、耕助たちは居残り組みと別れて駅へ向かった。

駅からは同じ電車に乗る女の子と2人になった。

「俺、中川耕助って言います。よろしく」

「浜田みのりです。こちらこそよろしく」

自己紹介をしあった2人は、ホームで堅苦しく頭を下げ合っているのに気付き、少し笑った。それで緊張がほぐれたのか、自然とおしゃべりが始まった。

「あのさ、ちょっと思ってたんだけど、入学式の日に関わなかった？」

「入学式の日？」

「うん。俺がサークルの申し込みをしてる時に来なかった？」

「あー！ あの男の子が中川君？」

「そうそう！ やっぱりそうだったんだ。なんかいろいろ質問してたから印象に残ってたんだ」

「そうなの。バレーボールの試合も観に行くのかなって思って」

電車が来たので2人は乗り込んだ。車内は意外と空いていたので、2人は難なく座ることができた。

「バレーボール好きなんだ？」

「うん。中学のときにバレー部だったの。それが結構厳しくてね。必死で練習して、なんとか試合にも出られるくらいになったの。と言ってもほとんど補欠だったけどね」

みのりは肩をすくめて笑いながら言った。

「中川君も何かスポーツしてたの？」

「俺は中・高とサッカー一部。生活の9割くらいがサッカーだったな。いい先輩にも恵まれて、いい仲間にも出会えた。俺の誇りだな、あの6年は。……ってちょっと大げさかな」

耕助は笑ったが、みのりは首を振って言った。

「ううん、そんなことないよ。それって大事なことももん。私は高校では帰宅部でバイトばっかしてたけど、やっぱ中学の時にクラブで一緒になって頑張った仲間は今でも連絡取り合うし、宝物だって思ってる」

そう言ったみのりは、ひとり言のように呟いた。

「『ゲームセット』でもそんな仲間ができるといいな」

電車を降りて歩いていると、みのりの携帯が鳴った。降りる間にアドレスを交換した耕助からのメールだった。

『今日は少ししかしゃべれなかったけど、これからもよろしくな。サッカーのことは俺が教えてあげるから、どんどん試合観にいきましょう！』

みのりはちょっと嬉しくなって、さっそくメールを返した。

『こちらこそ！ バレーの解説は私に任せといて。早く1回目の観戦があるといいね』

6月中旬になって、『ゲームセット』第1回目の活動があった。

今回は野球の観戦だ。2人とも野球に詳しいわけではなかったが、子供の頃からテレビなどで見慣れている為、十分に楽しむことができた。

先輩によると、アメフトやラグビーなどに行く場合は、前もってルールに詳しいメンバーによる講習会が催されるらしい。このサークルには、生で試合を見るのが好きだから入った人が多い。しかしルールも分からない試合に高いお金を払うのもツライ。そこでこの講習会が考案されたのだが、それがかなり好評だと言う。

「確かに、分からないスポーツの観戦をするくらいなら、その分のお金を他に回したくなっちゃうかもね」

「ルールブックを見ても分かんないしな」

ごく自然に一緒になった帰り道、2人はそんな話をしながら帰った。

「そのうち耕助くんにも、サッカーの講師の話がくるかもよ」

メールのやりとりで親しくなっていた2人は、いつしか『中川君・浜田さん』から『耕助くん・みのりちゃん』と呼び合うようになっていた。

「今からテキストでも作ってこうかな」

耕助は冗談めかして言いながら、みのりと一緒に電車を降りた。

「どうしたの？ 耕助くん、この駅じゃないよね？」

「送ってくよ」

「そんな、悪いよ。わざわざ途中下車してもらっちゃったら」

「いいの、いいの。どうせ俺はひとり暮らしなんだし、みのりちゃんは駅からちょっと歩いて行ってたろ？ もう遅いし危ないからさ」

「ほんと？ 正直、助かる。ほんとはね、駅からの道が大通りじゃないから、ちょっと怖い時あるんだ」

2人は肩を並べて歩いた。普通に会話しながらも、みのりの心臓はバクハツしそうだった。――なんでだろ。さっきまで何ともなかったのに……。耕助くんはどう思ってるんだろ。

1人の時は長く感じる道のりも、耕助と2人だとあっという間だった。

家の前に着いた、いや、着いてしまった時、みのりはもっと遠ければよかったのに、とさえ思っていた。そんなみのりの気持ちをよそに、耕助はすっと立ち止まって言った。

「じゃ」

「うん……。今日はありがとう。ごめんね、わざわざ」

「気にすんなって。あ、でもやっぱお礼してもらおうかな」

「え？」

「今日のお礼に、今度2人でどっか遊びに行かない？」

耕助に言われたみのりは、本当は飛び跳ねたいくらい嬉しかったのだが、必死で気持ちを落ち着けて言った。

「うん、いいよ。いつにする？」

明日はいよいよ耕助とみのりの初デートだ。

その日、みのりは大騒ぎだった。クローゼットから次々と服を取り出しては鏡の前に立ち、これも違う、あれも違うといった挙句に「着ていく服がない」と泣き出す始末だった。弟はそんなみのりの様子を半ば呆れて見ていたが、仕事から帰った母は部屋の惨状に目を丸くしながらも、状況をのみこむと優しく笑って付き合ってくれた。

「お母さんはこの服がいいと思うな」

母が手にしたのは、みのりも気に入っている柔らかい素材の服だった。

「でもその服はよく着てるもん。それじゃいつもと変わんないもん」

「だからね、この服をいつもと違う雰囲気に変えるのよ。そうね……、この細身のパンツとヒールを合わせて、それからこれ」

と母は自分のアクセサリーボックスからパールのネックレスを出してきた。

「これをつけてみて。バッグはこれね。はい、着替えてみて」

半ば強引に着替えさせられたみのりが母の前に立つと、母は大絶賛した。

「すごく似合ってるわよ。いつもとちょっと違ってて、でも違いすぎてなくて。うん、これがいいわよ。これに決定ね！」

「なんだかお母さんがデートに行くみたい」

みのりは苦笑いしながら鏡の前に立った。体の向きを変えながら、全身をチェックする。確かにみのりらしさもあって、なおかつ少しおしゃれをしている感じがする。

「……ほんとに似合ってる？」

「完璧よ！」

みのりは笑顔になった。

待ち合わせ場所にみのりが着くと、耕助はもう来ていた。

「おはよ！ ごめんね、遅れちゃって」

みのりが声を掛けると、耕助は腕時計を指しながら言った。

「まだ約束の時間になってないよ。2人ともせっかちだよな」

「あ、ほんとだ」

2人して笑いながら、初デートの開始となった。

海の近くにある大きな水族館は、耕助とみのりのようなカップルや家族連れで賑わっていた。大きな水槽を上からも下からも見られるということで、子供たちはガラスにへばりついて魚を見ている。耕助たちもその大きさに圧倒されながら、魚が泳ぎまわるのを見ていた。

「なんかさ、これだけ大きいと、海の中にいるみたいな気がしてこない？」

「うん。逆にさ、魚たちが『へえ、これが人間か』なんて見てたりしてな」

「うわっ、なんか怖いな～」

すべての水槽を見てまわり、近くのカフェでひと息ついていると、空がだんだん茜色に染まってきた。窓の外を見て、みのりは思わず呟いた。

「きれい……」

そんなみのりの横顔を見つめていた耕助が言った。

「せっかくだから散歩でもしよっか」

「うん、そうだね」

外に出てみると、昼間の暑さとは打って変わって涼しく、柔らかい風が吹いていた。

2人は他愛のない話をしながら、ブラブラと歩いた。ずいぶん歩いた時、耕助が急に立ち止まった。

「どうしたの？」

みのりが聞いても耕助は黙ったままだ。初めはカップルが等間隔に並んでいた海辺も、さすがにここまで来ると人の声すら聞こえてこない。ただ波の音が聞こえるだけだ。

みのりも何となく黙り込んでいると、耕助が海を見たまま言った。

「好きだ」

「え？」

あまりにも唐突だったので、みのりはびっくりしてしまった。

「みのりちゃんのことを好きだ。俺と付き合っほしい」

今度はみのりのほうを向き、耕助ははっきりと言った。みのりは耕助の真剣な眼差しをしっかりと見返し、やがて微笑んで言った。

「『みのり』でいいよ、これからはね」

耕助は一瞬げんな表情をしたが、すぐにその言葉の意味を理解した。

「やったー！」

耕助は大声で叫び、しっかりとみのりを抱きしめた。

大学卒業後、みのりは調理の専門学校に入っていた。子供の頃から毎日していた料理を、真剣に学ぼうと思ったのだ。

もともとみのりは、大学を卒業したらなるべくいい会社に入るつもりだった。それが、本当なら家計を助けるために高卒で働くべきところを大学まで行かせてくれた母への恩返しだと思っていた。大学で色々なことを学び、いい仲間と出会い、そして何より耕助と恋をすることができた、みのりはそれだけで充分だった。

そんなみのりに、ある日母が言った。

「みのりの本当にしたいことは何？」

「え？ 本当にしたいこと？」

「そう。いい会社に入っていいお給料もらって……。そんなことがみのりの本当にしたいことなの？ それでいいの？」

「突然何を言い出すのよ。いいに決まってるじゃない。大学に行かせてくれただけで充分。ほんとに感謝してるの。だから今度は私がお母さんを助けてあげたいの」

母は少し考えて、思い切ったように言った。

「お母さん、ちっとも嬉しくないよ」

「え？」

「お母さんのためにそんなことしてくれても、ちっとも嬉しくないよ。お母さんはね、みのりにはみのりの人生を生きてほしいの。自分がこうと思った道を歩いてほしいの。それがお母さんの幸せなんだから」

「お母さん……」

「みのりは昔から優しく、いつもお母さんのことを助けてくれてたわ。だから、こんな大切な決断はお母さんのためなんて考えないでほしいの。自分の道を歩きなさい」

みのりが何もいえないでいると、母は笑って言った。

「それともお母さんにもう隠居させる気？ こう見えてもお母さん、まだまだ若いんだからね」

みのりは泣いた。嬉しくてありがたくて、母に抱きついて泣いた。そして心に誓った。この母の思いを裏切らないように、自分の道をしっかり歩こうと。決して妥協せずに歩こうと。

自分は何をしたいのか。それを考えた時、真っ先に頭に浮かんだのが料理だった。小さい頃から、みのりが作った料理を母はいつも笑顔で食べてくれる。「みのりが作った料理を食べると疲れも吹っ飛ぶわ」とも言ってくれる。みのりは、もっとたくさんの人にそんな笑顔になってほしいと思った。自分の作った料理で、幸せで温かい気持ちになってほしいと思った。

みのりは料理人になることに決めた。

それからのみのりは毎日が忙しかった。学校の授業はもちろんのこと、食材の勉強や新しい料理の研究にも励んだ。その合間には、なるべく母に負担をかけずにすむようにバイトにも精を出した。

一日が終わるといつもクタクタだったが、いつか自分の店を持つという夢に向かって、みのりは走っていた。

耕助は大学を卒業してサラリーマンになった。

第1希望の会社ではなかったが、いざ入社してみると水があっていた。初めのうちは分からないことだらけで先輩にも怒られてばかりだったが、そこは耕助ならではの柔軟さで、どんどん新しいことを吸収していった。

3年目になった今は、新人教育も任されるくらいだ。体育会系の耕助は先輩にも後輩にも受けがよく、仕事もうまくいって毎日がとても充実していた。

夜遅くに帰宅して、風呂上りのビールを飲む。これが目下のところ、耕助の唯一の楽しみだ。ひと息ついて郵便物をチェックしていると、サークルのOB会のお知らせが来ていた。OB会は毎年催され、スポーツ観戦と飲み会がセットになっている。

「今年も行けそうにないな」

耕助は呟いて返信はがきを手を取った。

――みのりは参加するのだろうか。

記入しようとした手が止まる。今まで1度だけ耕助が参加できた時は、みのりは来ていなかった。

みのりとは大学時代、くだらないことで笑ったり喧嘩したりして幸せな日々を送っていた。サークル内でも公認の仲で、皆は卒業したら結婚するものだと思っていたらしい。実際、耕助もみのりもそのつもりだった。

だが耕助が仕事にやりがいを感じ始め、みのりが学校とバイトに忙しくなってきたから、少しずつすれ違いが続くようになった。そして気が付いた時には手遅れだった。いつの間にか、2人は別の人生を歩き始めていた。

――みのりは元気になっているのだろうか。もしみのりが参加するんだったら……

そこまで考えて、耕助は頭を振った。

「みのりとはもう終わったんだ」

自分に言い聞かせるように声に出して言い、欠席に○をつけた。

耕助は仕事から帰ると、まず子供の寝顔を見に行く。これは毎日の習慣になっていた。子供の寝顔を見ていると、疲れもどこかへ飛んでいってしまうような気がする。

「帰ってたの」

妻が風呂から出てきて言った。

「ああ」

「私もう寝るから勝手にやってね」

「分かった」

妻はさっさと寝室に入っていく。寝室と言っても、耕助との寝室ではない。子供が生まれてからは、耕助と妻は別の部屋で寝ている。育児に疲れた妻が、帰りの遅い耕助を気にせず眠れるようにと思って始めたことだったが、おそらく子供が大きくなっても元には戻らないだろう。

妻は耕助が新人教育をした、会社の後輩だった。物事に対してズバズバ言うが嫌味がなく、気さくで愛嬌もあったので、周囲からの人気もそこそこあった。

そんな彼女がある日、耕助を食事に誘ってきた。

「相談があるんです」

そう言われると断るわけにもいかず、耕助は誘いに応じた。相談というのは他愛も無いことだったが、おしゃべりも楽しかったので、2人は2軒目に繰り出した。

2人はいろんな話をしながら飲み、気分よく酔っていた。その時彼女が耕助の耳元に口を寄せて囁いた。

「私、今日お泊りセット持ってきたんです」

耕助がびっくりして彼女を見ると、彼女は少し笑って耕助の手を引いた。

それからしばらくたったある日、耕助は彼女に呼び出された。

開口一番、彼女は言った。

「できたの」

「え？」

耕助が訳が分からずにいると、彼女は少しイライラしたように言った。

「できたのよ、赤ちゃんが。妊娠したの」

あまりにも突然で耕助が呆然としていると、彼女がきっぱりと言った。

「結婚して」

「え？ ちょ、ちょっと待ってくれよ。俺たち別に付き合ってるわけでもないのに……」

「だからってあの夜のことを帳消しにできるとでも思ってるの？」

思わず大きな声を出した彼女は慌てて周りを見回し、声を落として懇願するように言った。

「ねえ、お願い。もうおなかには新しい命が宿ってるのよ。この子を殺せって言うの？ そんなこと、私にはできない」

耕助は迷ったが、結局結婚することにした。男として責任を取らなければならないという思いもあったが、心のどこかにいつまでも居続けるみのりを忘れるいい機会だとも思ったのだ。

慌しく式を挙げ、しばらくすると子供が生まれた。子供はかわいかったし、妻もよくやってくれていた。

——あの時結婚を決めてよかったな。

耕助は幸せを満喫していた。しかしその幸せは、すぐに壊れることになった。

みのりは26歳の時に結婚した。

専門学校を卒業してからレストランで修行を重ね、ようやくいくつかの料理を任されるようになった頃、叔母の勧めで見合いをした。本当はしたくなかったのだが、叔母には世話になっていたので断れなかったのだ。

会ってみると話やすく好感を持てたのだが、みのりには気がかりなことがあった。

みのりはいつか自分の店を開くことを目標に、料理の修業をしているところだ。朝早くから夜遅くまで働いている。そうなる当然、家庭にしわ寄せがいくことになる。だからみのりは、夢が叶うまでは結婚せずにいようと思っていた。

みのりが恐縮しながらそのことを彼に伝えると、彼はあっさり言った。

「それは気にしなくていいですよ。実は僕も昔は料理人を目指したことがあるんです。僕の場合はすぐに挫折しちゃったんですけどね」

「そうだったんですか」

「だから余計にあなたにお会いしたかったんです。僕は結局普通のサラリーマンになってしまったけど、あなたの気持ちはとても理解できるんです。あなたの夢を応援できるのは僕しかいないと思うんです。結婚してくれませんか？」

1年後、みのりは彼と結婚した。

なるべく彼に迷惑が掛からないように、家事も一生懸命こなしたが、なかなか両立は難しかった。

そんなみのりに、夫はいつも笑って言ってくれていた。

「いいんだよ。君には大きな目標があるんだから」

しかしそれも長くは続かなかった。

ある日みのりが仕事から帰ると、夫は既に帰っていた。慌てて夕食を作って夫に出すと、夫は冷たく言い放った。

「こんな餌みたいなもの、いらぬよ」

「餌って……。そりゃ簡単なものではあるけど、そんな言い方はないんじゃない？」

「だってそうだろう？ 君は客のためには心を込めて手の込んだ料理を作るのに、僕にはこんなものしか出さないんだから」

「それはあなたがお腹がすいているだろうと思ったからよ。それに手の込んだ料理じゃなくても、ちゃんと心は込めてるわ」

みのりはショックを受けて反論したが、夫の反応は冷たいままだった。

「ふん、どうだか。君は心の中で笑ってるんだよ。料理に挫折した僕なんかには、この程度のものでいいんだって。『あなたには才能がなかったけど、私にはあるのよ』って思ってるんだ」

「そんな……。そんなこと、1度も思ったことないわ！」

みのりは泣きながら言い返したが、夫は

「もう我慢できないんだ、こんな生活」

と言い捨てて、出て行ってしまった。

その日、耕助は朝から落ち着かなかった。

久々にサークルのOB会に参加できることになっただけでなく、夜の飲み会にはみのりも参加すると聞いたからだ。別れて以来、2人が顔を合わすのは初めてだった。

今日の観戦は耕助の大好きなサッカーだったのに、なかなか試合に集中できなかった。

――みのりに会ったら、まず何と言おう。みのりはどんな態度を取るだろう。みのりは……。

ついみのりのことを考えてしまう耕助は、それを頭から強引に押し出すようにして、大きな声で応援した。

「久しぶり！ 元気だった？」

みのりは店に入ってくるなり、耕助に声を掛けた。あれこれと思い悩んでいた耕助だったが、みのりの明るさに救われ、いつもの調子を取り戻した。

「この通りさ」

「何年ぶりだっけ」

「もうかれこれ5～6年になるな」

「そっか、それだけ会ってないんだもんね、耕助も年をとるわけだ」

「みのりこそ老けたよな」

「なによ失礼ね。これでもまだ『お姉さん』って声掛けられるんだから」

いつしか2人は学生時代のように話していた。

「みのり、料理の修業のほうはどうなんだ？ うまくいってるのか？」

「うん。専門学校を出てからレストランで働いてるんだけどね、これでも結構認められてきてるのよ」

「へえ、頑張ってるんだな」

「いつか自分の店を開くんだ。働き出した時はね、厳しくて辛くて毎日半ベソだったけど、将来のお店を絵に描いてみたりして乗り越えてきたの」

「遅いな。俺も楽しみにしてるよ」

「ありがと。オープンの日には耕助も呼んであげるからね。いつになるかは分かんないけど」

みのりは笑って言った。

「で、耕助はどうなの？」

「俺か？ 俺はまあ普通にサラリーマン戦士として頑張ってるよ。後輩がどんどん増えてくると、楽なようでちょっと面倒だったりもするんだけどな」

「そうなんだ？」

「やっぱ自分でやったほうが早いことでも、下の奴らにやらせないといけないとかさ。新人教育とかもやるしな」

「へ～え、耕助が新人教育ねえ～」

みのりがからかうように言うと、耕助は「なんだよ、それ」と言いながら笑った。みのりも一緒に笑った。

ひとしきりお互いの仕事の話をした後、みのりが聞いた。

「耕助、結婚は？」

「うん、2年前にな」

「知らなかったわ。遅ればせながら、おめでとうございます」

みのりがおどけて言うと、

「ほんと遅いよ。もう子供もいるってのに」

と耕助が言った。

「そうなの？ いくつ？」

「できちゃった結婚だったから、今1歳ちょっと」

「へえ、かわいい頃だね。じゃあ今は幸せの絶頂ってわけだ」

「普通ならな」

「え？」

「もう既に家庭内別居って感じなんだ。そりゃ子供を見るとかわいいとは思うけどさ」

「どうして？ あ、別に言いたくなければ言わなくてもいいよ」

「いや、別にいいよ。と言うより、たぶん誰かに話したかったんだと思う。今まで誰にも言っていなかったから」

耕助は手元のビールをひと口飲み、話し出した。

「あいつは会社の後輩でさ、俺が新人教育をしてたんだ。ある日あいつに誘われて飲みに行っ
つい……、関係を持ってしまった。その後は付き合うとかでもなく、何もなかったんだけど、そ
の1回で子供ができてしまった。初めは責任を取るつもりで結婚したんだけど、あいつも会社を
やめて子育てと家事を頑張ってくれてたし、俺も結婚してよかったと思った。幸せだと思っ
た。でもそれは俺がはめられただけだったんだ」

「はめられた？ どういうこと？」

「あいつは会社を辞めたかったんだ。でも親の手前や周りの目もあるし、ただ辞めるわけにはい
かなかった。生活もあるしな。そこで誰か有望な奴を引っ掛けて、寿退社することを計画した
んだ。そのカモとして、俺に白羽の矢が立ったってわけさ」

耕助は皮肉っぽく言った。

「でももし妊娠してなければ、耕助だって結婚してなかったわけでしょ？」

みのりは言ってから、ふと気付いた。

「まさか……」

「そう、その妊娠も計画通りだったんだ。1番危ない日に俺を誘って妊娠し、それを理由に寿
退社。すべてあいつの思い描いた通りになったんだ」

「そんな……。それは耕助の気のせいとかではないの？」

「そうだったらよかったんだけどね。残念ながら、あいつが友達と話してるのを聞きちゃった
んだ。それを黙っていれば、たとえ上辺だけであったとしても幸せな、いや、幸せそうな生活を
続けられたのかもしれない。でも俺はあいつに問い詰めずにはいられなかった。あいつは謝るど
ころか、『ばれちゃったんならしょうがないわね。でも私は絶対別れないわよ』って言い放った
んだ。その結果がこれさ」

耕助が半ば自嘲気味に言った。

「そうだったの。ひどい人もいるもんね」

みのりは暗い雰囲気吹き飛ばすように、明るく言った。

「あ～あ、せめて耕助だけには幸せになってほしかったのにな」

「どういうこと？ みのりも結婚したんじゃないっけ？」

「うん、したよ。1回はね」

「てことは離婚したってこと？」

「そ。去年ね。『もうこんな生活には耐えられない』って」

「こんな生活って？」

みのりは夫が出ていくまでのことを耕助に話した。

みのりの話を最後まで聞いて、耕助は言った。

「それで、そいつは出て行ったまま帰ってこなかったのか？」

「うん。しばらくたってから離婚届が送られてきた。手紙には慰謝料のこととか荷物のこととか
は書いてあったけど、私への言葉は何もなかった。ショックだったけど、ほんとに終わったん
だなって実感したわ」

「それにしても最後までちゃんと会いに来て話すべきじゃないのか？」

「たぶん、あの人はずっと辛かったのよ」

「みのりが忙しくて家のことができなかったから？」

「ううん。単純に私を見てるのが辛かったんだと思う」

「どういうこと？」

「あの人は『僕も料理人を目指していたから君を応援できる』って言ってくれてた。その気持ちに嘘はなかったと思うの。ただ間違っただけ。料理人志望だったからこそ応援できないのよ。だって自分が目指していて結局は果たせなかった夢を追ってる人がいるのよ、1番近いところに。家事がおろそかになることではなく、かつての自分と同じ夢を今も持ち続けている私を見るのが辛かったのよ。応援したい気持ちと、心のどこかでそれを妬ましく思う気持ちに挟まれて、あの人の心は壊れそうだったんじゃないかな。自分の心を守るためには、私と2度と会わないことが必要だったのよ」

「なるほどな。確かに辛いかもな」

「もし逆の立場だったら、私もそうなったと思う。そこまで考えずに『家事と両立しきれなくても大目に見てもらえるなら……』なんて、甘えた気持ちで結婚しちゃった私が悪かったのよ」

みのりは話してしまっただけで楽になったのか、飲んでいたカクテルのグラスを差し出し、

「マスター、おかわりちょうだい」

とやっている。するとマスターがメモを渡しながら言った。

「お仲間の方から、話がひと段落したらこれをお渡しするようにと言われておりました」

耕助が受け取って見てみると、メモには地図と一緒にこんなことが書かれていた。

『お前ら、深刻に話しすぎだよ。（笑）俺たちは2次会に繰り出すから、話が終わったら来いよ！』

そういえば、いつの間にか皆の姿は見えなくなっていた。

「あいつら、ひと声掛けりゃいいのに」

「でも皆が出て行くのにすら気付いてなかった私たちも私たちよね」

2人は顔を見合わせて笑った。

「で、どうすんの？」

「俺はもう帰ろうかな。帰ったところで……って感じもあるけどな」

「私も帰るわ。今日は皆で騒ぐ気にもなれないし」

2人は連れ立って店を出た。

同じ方向だったので、一緒にタクシーで帰ることにした。週末の夜にしては簡単に空車が見つかった。

近いほうの耕助の家を告げると、2人は黙り込んだ。耕助はただ前を見つめている。みのりも流れていくヘッドライトを見ていた。

ふいにみのりの手に何かが触れた。見ると耕助が前を向いたまま、みのりの手に自分の手を重ねていた。みのりは耕助の横顔を見つめ、耕助の手を握り返した。耕助もみのりのほうを向き、2人は見つめあった。

しばらくそうした後、耕助は運転手に言った。

「すみません、行き先を変えて下さい」

みのりはそっとベッドを抜け出した。素早く身支度を整えてベッドのほうを見ると、耕助はまだ夢の中のようだった。

耕助の寝顔を眺めていると、みのりは心から愛しいと思った。

――でも耕助には奥さんも子供もいる。たとえそれがどんな家庭であったとしても、私に壊す権利はないわ。

みのりは鏡の前に座って口紅をひくと、立ち上がった。

「さよなら、耕助」

2人の間のドアが、小さな音をたてて閉まった。

今日は2週間ぶりに子供と会う日だ。たまにしか会わないので、毎回どんどん大きくなってくる。幼稚園で走り回っている姿は、耕助の子供の頃とだぶって見えた。

耕助は微笑みながら子供を見ていた。だが話すことはない。会うと言っても、こちらから一方的に見るだけなのだ。「子供が混乱するといけないから」というのが妻の、いや、元妻の言い分だった。

妻とは4年前に正式に別れた。

みのりを一夜を共にした日、耕助は妻に対する気持ちがまったくないことにはっきり気付いた。

帰宅するなり離婚を言い出した耕助を、妻は思いつく限りの言葉で批判し、罵った。だが耕助は何も反論しなかった。自分だってみのりを忘れるために結婚したようなものだ。妻のことだけを一方的に責める気にはなれなかったのだ。

妻は、自分の要求をすべてのませることでようやく納得し、離婚届に判を押した。

妻ならまたすぐに次のカモを見つけるだろうと思ったが、それは心の中に留めておいた。とにかく離婚ができればそれでよかった。

あの日耕助は、みのりのことをやはり愛しているということにも気付いた。あの後すぐに、みのりは耕助の前から姿を消してしまっただが、耕助はあえて捜そうとはしなかった。

――みのりは同情で俺と寝たわけじゃないはずだ。妻がいるから身を引いただけだ。きっといつか会える。いつかきっと……。

耕助は信じていた。

「ありがとうございました！」

小さな店の前で、みのりが頭を下げる。みのりは必ずこうしてお客様を見送ることになっている。

4年前に弟が結婚し、その翌年に母が他界したのをきっかけに、みのりはこの町に移ってきた。そして小さいながらも念願の自分の店を開いた。

『来た人が笑顔になる店』をコンセプトに、料理はもちろんのこと、インテリアや音楽にまで気を配り、居心地のいい店を作り上げた。あまりに座り心地のいい椅子のせいで、客が長居し続けるのが玉にキズだったが……。実際、みのりの店は常連客がほとんどを占めるようになっていた。皆この店の料理と居心地と、みのりとおしゃべりを目当てに来てくれる。それがみのりには嬉しかった。

「お腹すいた～！ 今日のオススメは何？」

いきなり言いながら入ってきたのは、店の近くに住むOLだ。

「なに、子供みたいに」

みのりが軽くにらむと

「子供みたいなもんよ。みのりさんの手料理で生きてんだから」

と彼女は真面目な顔で言った。

「そりゃどうも。でもね、あなたの母親って年齢ではないと思うわよ」

みのりは笑いながら水を出して言った。

「今日のオススメは『かつをの韓国風』よ」

「んじゃ、それにしよ。みのりさんのオススメにしとけば、はずれがないもんね」

「ありがと。でもちょっとは料理もしてみたら？」

「ダメダメ。なんか私、料理のセンスないのよね。まずいもんなんて食べたくないし」

「はいはい。じゃ、ちょっと待っててね」

こんな風にして、みのりの毎日は過ぎていった。

耕助は誰もいない海辺に立っていた。10年間、同じ日にこの場所に来ている。ここに来れば、いつかみのりに会えるような気がしていた。

20年前の今日、この場所で耕助はみのりに告白をした。

――あれからいろいろなことがあったな。

耕助はただ海を眺めていた。たまらなくみのりに会いたかった。

空の色がどんどん濃くなり、少し肌寒くなってきた。耕助は吸っていたタバコを携帯灰皿に押し付け、そろそろ帰ろうと振り向いた。

と、そこに思いがけず人がいた。街灯からの明かりが耕助の体で遮られ、顔は見えない。

「あ、失礼」

耕助がそう言って体の向きを変えると、その人の顔が見えた。

「みのり！」

「久しぶりね」

みのりは微笑んで言った。

「耕助も来てたの」

「ああ。10年前から毎年な」

「私も、耕助が離婚したって聞いて以来、毎年来てたのよ」

「それで会わなかったなんて不思議だな」

みのりは海を見ながら言った。

「神様が仕組んだのね。今日のために、それまでは会えないようになってたのよ、きっと」

みのりは耕助をしっかり見て言った。

「だって20年前、耕助と私はここから始まったんだから」

「みのり……」

耕助は手を差し出した。みのりはその手をしっかり握った。

「ここまでたどり着くのに、随分長くかかったな」

「ほんとね」

2人は微笑み合い、ゆっくりと歩き出した。

(完 結)

もういちど始めよう

<http://p.booklog.jp/book/42796>

著者 : nagomino-riko

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nagomino-riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42796>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42796>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.